

目的 人間の情報システムの中で、人間の行動と諸機能との相互関係、特に生活行動の一部としての被服行動がどのようなメカニズムを持ち、因果関係を持つかを明らかにしていきたいと考える。このメカニズムを明らかにすることは、被服行動の嗜好や選択の意味概念やデザインや色、柄、生地といった対象との対応関係も含めて、明らかにすることも意味する。本研究の目的は、上記の関係を明らかにするためには、まずこのスクリプトやスキーマという認知心理学理論をもとに要因を整理し、相互に関係するネットワークを明らかにすることにある。

方法 三重県M短大生を対象に、嗜好を始めとする生活の感覚的傾向と被服行動との関係を明らかにする目的で、集合調査法による質問紙調査を実施した。対象とした女子短大生は111名。質問紙の項目は、被服行動、嗜好行動、セルフイメージ、生活態度、充実感、憧れ、満足感などの項目である。分析方法は、因子分析、重回帰分析、個人差を配慮したMDS、デュアルスケーリング、リズレルモデル等を使用した。

結果と考察 ① 基本属性 平均19.14歳、自宅通学者83.8%、小遣いは、1万円以下24.3%、2万円以下28.8%、3万円以下24.3%。日常生活では、食生活と住生活とにやや充実感を感じており、学生生活と衣生活に充実感が低いと感じている。② 生活堅実型因子と貯蓄と専門職、家族重視型因子と豪華ホテルでの結婚式への憧れ、各因子と装い型や生活態度等との関係が認められた。③ 被服行動の嗜好性から一対比較法デュアルスケーリングから、3構造「材質」「流行・不偏」「同調・準備」の要因が認められる。